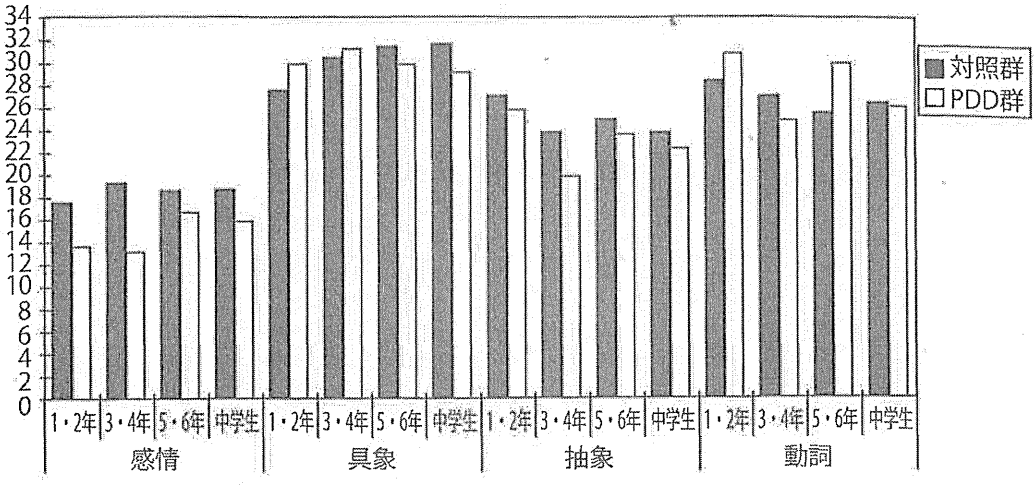

図2　刺激語のカテゴリー別の反応数割合(%)

要因分散分析を行った．その結果，学年グループの主効果と交互作用はともに有意ではなかった．統計的には有意ではなかった(F (1,111) = 2.92, p < .10)が，PDD群の方が対照群よりも総反応数が少ない傾向がみられた．

3. 刺激語のカテゴリーおよび反応数との関係

次に，刺激語のカテゴリーによる反応数の違いを検討した．総反応数に個人差があるため，総反応数に対する反応数の割合を刺激語のカテゴリー別に算出し，その値を比較した．各群・各学年グループの刺激語のカテゴリー別反応数割合を図2に示す．

刺激語のカテゴリー（感情語，具象語，抽象語，動詞）×群(PDD群，対照群)×学年グループの3要因分散分析を行った結果，刺激語のカテゴリーの主効果が1%水準で認められた(F (3,333) = 104.08, p < .01)．また，刺激語のカテゴリーと群の交互作用が5%水準で有意だった(F (3,333) = 3.46, p < .05)ため，単純主効果の検定を行った．その結果，群の単純主効果は，感情語においてみられ(F (1,444) = 10.20, p < .01)，PDD群の方が対照群よりも総反応数に対する感情語における反応数の割合が少なかった．また，刺激語のカテゴリーの単純主効果はPDD群，対照群ともに有意であった(F (3,333) = 71.12, p < .01, F (3, 333) = 36.42, p < .01)．多重比較の結果，PDD群において，具象語，抽象語，動詞よりも感情語の割合が少なく，抽象語が具象語と動詞よりも割合が少なかった(すべてp < .05)．具象語と動詞の間に有意差はみられなかった．つまり，割合の高い順に並べると，具象語・動詞＞抽象語＞感情語となる．また，対照群において，具象語，抽象語，動詞よりも感情語の割合が少なく，抽象語と動詞は具象語よりも割合が少ないということが分かった(すべてp < .05)．抽象語と動詞の間に有意差はみられなかった．つまり，割合の高い順に並べると，具象語＞動詞・抽象語＞感情語であった．

4. 反応の内容と表現の特徴

「文章様表現」「個人的なエピソード」「詳細すぎる内容」「駄洒落様表現」の反応数について，総反応数に対する反応数の割合を刺激語のカテゴリー別に算出し，その値を比較した．それぞれについて，図3・4・5・6に示す．

「文章様表現」について，刺激語のカテゴリー×群×学年グループの3要因分散分析を行った結果，刺激語のカテゴリーの主効果が1%水準で認められた(F (3,333) = 17.88, p < .01)．ま

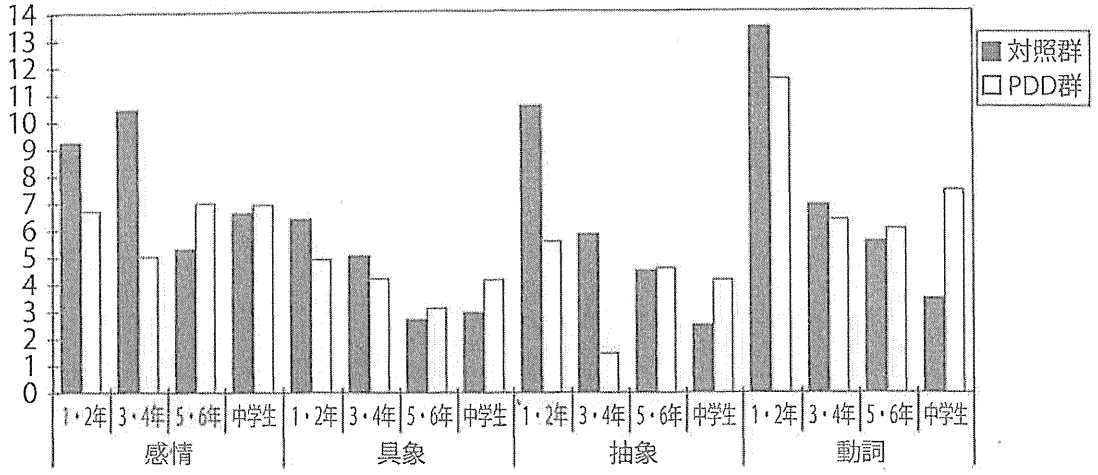

図3　文章様表現の割合(%)

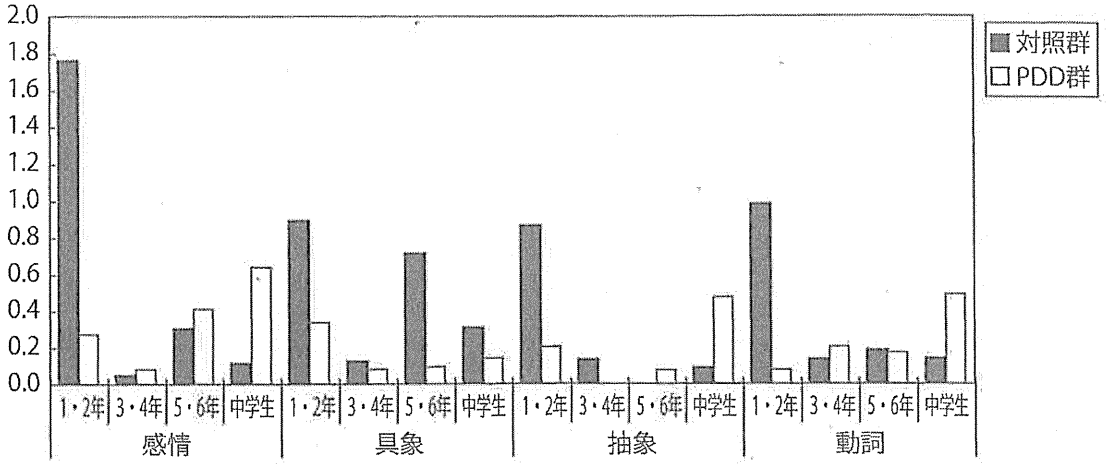

図4　個人的なエピソードの割合(%)

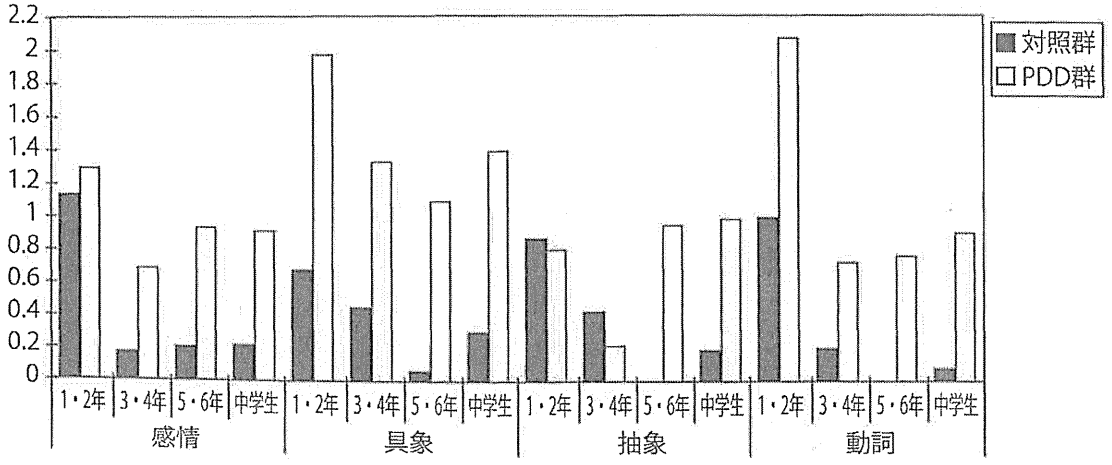

図5　詳細すぎる表現の割合(%)

た，刺激語のカテゴリーと学年グループの交互作用が5%水準で有意だった(F (9,333) = 2.42, p < .05)ため，単純主効果の検定を行った．結果，学年グループの単純主効果は，動詞においてみられた(F (3,444) = 5.03, p < .01)．多重比較の結果，動詞においては，1・2年生が他のすべての学年群よりも「文章様表現」の割合が高いということが分かった(すべてp < .05)．また，

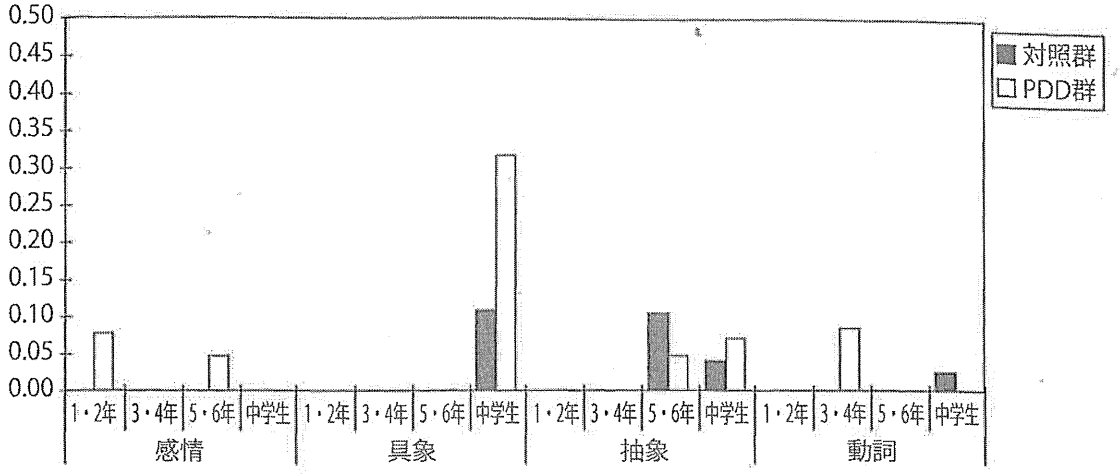

図6　駄洒落様表現の割合(%)

刺激語のカテゴリーの単純主効果は，すべての学年グループにおいて有意であった(F (3, 333) = 11.57, p < .01, F (3,333) = 5.67, p < .01, F (3,333) = 3.52, p < .05, F (3,333) = 4.38, p < .01)．多重比較の結果，1・2年生においては，感情語，具象語，抽象語よりも動詞で「文章様表現」の出現の割合が高くなっていた(すべてp < .05)．3・4年生においては，具象語，抽象語よりも感情語において「文章様表現」の出現の割合が高く，抽象語よりも動詞において割合が高くなっていた(すべてp < .05)．5・6年生においては，具象語よりも感情語において「文章様表現」の出現の割合が高かった(すべてp < .05)．中学生においては，具象語・抽象語よりも感情語において，具象語・抽象語よりも動詞において，「文章様表現」の出現の割合が高かった(すべてp < .05)．

次に，「個人的なエピソード」について，刺激語のカテゴリー×群×学年グループの3要因分散分析を行った結果，刺激語のカテゴリーと群と学年グループの交互効果が有意であった(F (9,333) = 203, p < .05)．単純交互作用の検定を行った結果，1・2年生において群と刺激語のカテゴリーの交互作用が有意であり(F (3,333) = 3.15, p < .05)，対照群において刺激語のカテゴリーと学年グループの交互作用が有意であった(F (9,333) = 2.60, p < .01)．さらに，単純交互作用の単純主効果を検定した結果，1・2年生の感情語において，「個人的なエピソード」の出現の割合が，PDD群よりも対照群の方が高かった(F (1,444) = 6.78, p < .01)．また，対照群の感情語において，学年グループの単純主効果が有意であり(F (3,444) = 4.05, p < .01)，対照群の1・2年生と5・6年生において刺激語のカテゴリーの主効果が有意であった(F (3,333) = 6.62, p < .01, F (3,333) = 3.28, p < .05)．多重比較を行った結果，対照群の感情語においては，1・2年生が他学年よりも「個人的なエピソード」の出現の割合が高かった．また，対照群の1・2年生で，他のカテゴリーよりも感情語において「個人的なエピソード」の出現の割合が高かった(すべてp < .05)が，5・6年生では有意な差はみられなかった．なお，PDD群においては刺激語のカテゴリーおよび学年グループの効果はみられなかった．

「詳細すぎる表現」について，刺激語のカテゴリー×群×学年グループの3要因分散分析を行った結果，刺激語のカテゴリーの主効果と群の主効果が認められた(F (3,333) = 3.73, p < .05, F (1,111) = 6.78, p < .05)．また，刺激

語のカテゴリー×群の交互作用が1%水準で認められた(F (3,333) = 4.20, p < .01)ため，単純主効果の検定を行った結果，感情語，具象語，動詞において群の単純主効果が認められた(F (1,444) = 3.20, p < .10, F (1,444) = 13.16, p < .01, F (1,444) = 7.19, p < .01)．つまり，「詳細すぎる表現」の出現の割合が，感情語，具象語，動詞において，PDD群の方が対照群よりも高かった．また，PDD群において，刺激語のカテゴリーの単純主効果が認められた(F (3,333) = 7.73, p < .01)．これについて多重比較を行った結果，感情語・抽象語よりも具象語において，「詳細すぎる表現」の出現の割合が高かった(すべてp < .05)．

最後に，「駄洒落様反応」について，刺激語のカテゴリー×群×学年グループの3要因分散分析を行った結果，刺激語のカテゴリーと学年グループの交互作用が1%水準で有意だった(F (9,333) = 2.32, p < .05)ため，単純主効果の検定を行った．その結果，学年グループの単純主効果は具象語において有意だった(F (3,444) = 6.39, p < .01)．多重比較の結果，具象語においては，1・2年生，3・4年生，5・6年生よりも中学生に「駄洒落様反応」の出現の割合が高かった(すべてp < .05)．また，学年グループの単純主効果は，動詞において有意だった(F (3,333) = 6.47, p < .01)．多重比較の結果，中学生において，感情語・抽象語・動詞よりも具象語において「駄洒落様反応」の出現の割合が高かった(すべてp < .05)．

Ⅳ．考　察

1．意味ネットワークの広がりに関する検討

今回の実験では，PDD群の方が対照群よりも総反応数が少ない傾向がみられた．また，感情語において，PDD群も対照群も最も反応数が少なくなることは共通していたが，特にPDD群において反応数が減少することが示された．PDD群において感情語の連想の低下がみられるという本研究の結果は，十一(2000b)の結果と整合的である．また，井上(2004)がSnow, M (1987)を取り上げ，感情表出において，幼児期の自閉症群が対照群と比較して相互作用の中で明確な感情を用いることが少ないと指摘した考察を裏付けるものと言える．

これらの結果から，PDD群は対照群に比して，呈示された刺激語からの自由連想を行う際に，確かに意味ネットワークに沿った言語表象に活性化の伝播が生じるが，その広がりが狭いという可能性が考えられる．また，この傾向は特に感情を伴う刺激語においてみられ，PDD群が感情をもとに意味ネットワークを活性化させることの苦手さを有することが示された．

井上(2004)は，PDD児者への支援として，感情の理解・表出行動の成立において社会的刺激が強化機能を持つこと，つまり臨床場面で伝統的にいわれているような“子どもの感情を読み取り言語化する”といった対応は，子どもの感情語表出の発達において重要な意味を持つと論じている．これを踏まえ，本研究の結果からは，PDD児に対する支援の中で，一つの事象から意味のネットワークを広げていけるように，言葉を添えたりヒントを与えたりするなどの支援の必要性があること，特に感情については，関連する出来事に目が向くように，また体験と感情が繋がるように支援者側から言及していくことが重要であると言える．

2．表現の独自性に関する検討

吉橋(2006b)で示唆された「文章様表現」の多さは，本研究の結果では，PDD群の特異性としては見られなかった．群による差よりもむしろ，刺激語のカテゴリーによる相違の視点を取り入れて考察すべき結果であった．PDD群も対照群も，動詞と感情語が提示された場合の反応

に「文章様表現」が多く，これらの「体験的」な内容については，不適切な情報を除外して重要な情報に焦点化することが難しいことが分かった．今回の結果にみられたような傾向が，成人になるにつれ，容易になってくるものなのであるのかどうかについては今後検討を重ねる必要がある．また支援の際には，一般的に児童・生徒が，年齢を重ねても自己の「体験」について重要な情報に焦点化することは大変な作業であることを念頭におくことが重要である．

次に，「個人的なエピソード」については，感情語において1・2年生では対照群の方がPDD群よりも「個人的なエピソード」の出現頻度が多かった．また，対照群内での加齢に伴う変化をみても，1・2年生は他学年よりも感情語における「個人的なエピソード」の出現頻度が高かった．ただし，3・4年生以降は感情語における「個人的なエピソード」の出現頻度の優位性が見られなくなっている．これは，対照群では年齢を重ねるとともに「個人的なエピソード」としての体験が汎化し，概念としてのまとまりを得ていくことになることを示唆していると考えられる．一方，同様の発達的な傾向がPDD群には認められなかった．PDD児の一部に見られるタイムスリップ現象の背景として，杉山(1994)は，症例の検討から，PDDの記憶や意識が言語を軸とした健常者の構造と異なる構造特徴が存在することをあげ，PDD児・者は，個人の感情体験や時間体験が言語を軸として整理および汎化されず，出来事を引き金にエピソードが想起されてしまうことを示唆として述べている．本研究の結果からの考察は，「個人的なエピソード」の処理が対照群とは異なるプロセスをたどる可能性があるという指摘にとどまるが，今後もさらに，PDD児の「個人的なエピソード」がどのように汎化のプロセスをたどるかという視点で，言語を用いた課題を用いて検討を重ねることは，支援を考えるうえでも有益である．

「詳細すぎる表現」については，感情語・具象語・動詞においてPDD群の方が対照群よりも出現頻度が高く，またPDD群内において，具象語で「詳細すぎる表現」の出現頻度が最も高くなるという結果であった．つまり「詳細すぎる表現」の出現頻度の高さは，刺激語のカテゴリーに依存するところはあるが，PDD群に特異な反応であると考えられる．杉山(1998)は，PDD者の手記の特徴の一つとしてみられた「詳細すぎる・マニアックな説明」の背景として，PDD児・者が，出来事を自分との関係で再構成をすることに困難さを有し，体験との間の余裕や距離感が乏しいことがあげられると考察している．特に，本研究における感情語・動詞での「詳細すぎる表現」の出現頻度の高さは，杉山(1998)の考察を裏付けるものと言えよう．また，最も反応数の多い具象語において最も出現頻度が高くなったことは，意味ネットワークの伝播が活性化されるほどに，焦点が狭まり，詳細な部分にネットワークが広がる現象が生じていると考えられる．この背景に，藤田(2005)が述べるように，PDD児が，課題に必要のないノード(概念の結合)の活性化を抑制することに困難さを抱えていることがあると考えられる．よって，支援の際には，PDD児の体験している感情や動きに対して，客観的な視点が持てるように支援者側から分かることを助言として伝えること，分かりやすい出来事についてマニアックになりすぎていく傾向があるため，その抑制を助けることが必要であると言える．

最後に，「駄洒落様反応」は，本研究の結果では中学生において多くみられる反応であると言えるものであった．ただし，これは反応として出てくることがまれな表現形式であり，PDD群45人中6人(全員の反応数を合わせて9個)，対照群75人中3人(全員の反応数を合わせて7個)

であった．この割合をみるとPDD群に特有の反応ではないと断言はできない．また，反応の内容を詳しくみると，本研究の刺激語の意味表象というより音韻表象に対する反応であるとみなされ，十一(2000a)の指摘するPDD児における言語の音韻処理の優位性を示していると考えられる．今後，この処理ルートに関しても，症例を通した細かな分析を行うなど方法を変えて，さらに知見を重ねていくことが必要である．

3．展望

今後さらに意味ネットワークの広がりについて知見を深めるため，反応語に関して，ノード数のみならずその関係リンクの種類(カテゴリー)数の分析などを行っていくこと，荒木(1987)で行われているように，反応語の品詞や感情語の出現頻度を分析することなど質的な検討を行っていくことが必要と言えるだろう．

また今回は，対象が小・中学生に限られたものであった．そして，分析を，2学年で1グループとして扱っており，結果に多少なりともバイアスがかかっている可能性がある．よって，今後は，対象の人数と年齢範囲を広げた検討を行うことで，定型発達との発達の相違を探っていくことも重要である．

V．結　語

本研究は言語連想課題を実施し，その結果をPDD群と対照群を比較検討することで，PDD児の意味ネットワーク構造の特徴を検討することを目的として行われた．結果から，PDD児は感情を表す語彙においても，意味ネットワークが形成されることが明らかになったが，その広がりは，対照児よりも狭いことが分かった．また，回答内容の特徴から，課題に必要のないノード(概念の結合)の活性化を抑制することに困難さを抱えていることが指摘された．さらに，必要な情報に焦点を絞ろうとすると，内容が詳細になりすぎることが明らかになった．

謝　辞

実験参加者として協力いただいたアスペ・エルデの会会員の皆様，対照群として参加してくださった小・中学生の皆様，そして，評定作業をお手伝いいただきました名古屋大学大学院の林陽子さん，細溝さやかさん，望月朝世さんに深く感謝いたします．

文　献

荒木紀幸（1987）：小学生の連想基準表と連想の特徴．兵庫教育大学研究紀要 8（1）：103–130

Collins, AM, Loftus, EF（1975）：A spreading-activation theory of semantic processing. Psychological Review 82：407–428

藤田知加子・行廣隆次・川上正浩，他（2005）：高機能広汎性発達障害児の虚再生および虚再認に関する研究．中京大学社会学部紀要　19（2）：15–28

林　幹也（2001）：社会的認知研究における漢字かな混じりの性格特性後を用いた情動ストループ課題の利用可能性に関する検討．名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）48：291–300

今栄国靖（1975）：連想基準表における単語の感情的意味．愛知教育大学研究報告 24：103–113

井上雅彦（2004）：自閉症児者の感情理解とその指導可能性に関する行動分析学的検討．発達障害研究 26（1）：23–31

神尾陽子，Robins Diana，Kelly Elizabeth，他（2004）：アスペルガー障害の言語特徴―単語を用いたプライミング知見より―．第45回日本児童青年精神医学会総会

小林隆児（2005）：自閉症の言葉の成り立ちを考える（第1部）青年期・成人期編．児童青年精神医学とその近接領域 44（1）：16–37

国立国語研究所（1981）：幼児・児童の連想語彙表東京書籍．

明翫光宜，吉橋由香，杉山登志郎（2005）：自閉症研究の現状と展望．脳と精神の医学　16（1）：5–16

Phelps EA, LaBar KS, Spencer DD（1997）：Memory for emotional words following unilateral temporal lobectomy. Brain Cogn. Oct. 35（1）：85–109

笹屋里絵（1997）：表情および状況手がかりからの他者感情予測．教育心理学研究　45（3）：312–

319
杉山登志郎（1994）：自閉症にみられる特異な記憶想起現象－自閉症のタイムスリップ現象．精神神経学雑誌 96（4）：281－297
杉山登志郎，末田佳代，西沢めぐ美，他（1998）：高機能広汎性発達障害青年の手記の分析．乳幼児・心理学研究 7（1）：41–49
Snow M, Hertzig M, Shiapiro T（1987）：Expression of emotion in young autistic children Journal of the American Academy of Child Psychiatry 26：836–838
高階美和，犬飼陽子，井上雅彦（2006）：高機能自閉症における感情理解・表出の指導―日常生活への般化の検討―．発達心理臨床研究（12）：113–122
田中優子，神尾陽子（2007）：自閉症における語用論研究．心理学評論 50（1）：54–63
十一元三，神尾陽子（1998a）：自閉症の言語性記憶に関する研究．児童青年精神医学とその近接領域 39（4）：364–373
十一元三，神尾陽子（1998b）：間接プライミングを用いた自閉症の言語連想の研究．精神医学40（6）：623-628
十一元三，神尾陽子（2000a）：高機能自閉症における言語の処理水準に関する研究．脳と精神の医学 11（1）：39–45
十一元三，神尾陽子（2000b）：潜在記憶検査から見た自閉症の感情理解と言語の特性．児童青年精神医学とその近接領域 41（1）：44–56
吉橋由香（2006a）：高機能広汎性発達障害児の感情認知処理の自動性に関する研究―閾下感情プライミング課題を用いた実験的検討―．小児の精神と神経 46（4）：265–274
吉橋由香，藤田知加子，川上正浩，他（2006b）：高機能広汎性発達障害の意味的ネットワーク構造に関する検討：過活性抑制の枠組みから．中京大学社会学部紀要 20（1・2）：19–31

*　　*　　*

■資　料■

思春期広汎性発達障害児の性行動の特徴と保護者のニーズの検討

川　上　ちひろ*　　辻　井　正　次**

Key words：広汎性発達障害，思春期，性行動，男子

要旨：思春期，青年期広汎性発達障害児者の性に関連する場面での不適切なふるまいなどの性行動の実態を把握するために，思春期広汎性発達障害児男子(12－18歳)の保護者51名に子の性行動の特徴とそれに対する保護者のニーズをアンケート調査した．その結果，主に中学生で着替えやトイレ場面で恥ずかしさを感じていないふるまいがみられるなど，二次性徴を迎え外見はほぼおとななのに，年齢相応の行動が修得できていないアンバランスな社会的行動がみられた．プライバシー感覚について，年齢が上がるとともに理解が向上していることが明らかになった．また保護者は子どもの性に関する心配や不安を多く抱えており，中学生で約7割，高校生で9割以上が子の性に関することで心配していることがあると回答した．広汎性発達障害児者や保護者への性に関する具体的支援が十分になされておらず，障害特性を考慮したプログラムを開発し支援方法の検討を行う必要が明らかになった．

Ⅰ．目　的

広汎性発達障害児者(pervasive developmental disorders：以下PDD)の思春期，青年期の課題の一つに，性に関連する場面での不適切なふるまいがあげられることが多い．Rubleら(1993)によれば，自閉症の子を持つ保護者への調査で，子どもたちが「不適切な性行動を示す」と認識している親たちが57％おり，そして親たちの主な心配事は「(一般的な)性行動を誤解したことによって起こる，誤って解釈した子どもたちの性行動」であると述べている．またHellemansら(2007)はアスペルガー症候群の青年期について「最大の問題は本質的な衛生観念の欠如，セクシュアリティについて率直に話し過ぎること，公の場で生殖器に触れること，他人がいるところでマスターベーションすることである」と述べている．これらはPDDの社会性や意思疎通の発達の未熟さなどの障害特性による行動が，その場の文脈にそぐわないため，結果的に社会的に

Chihiro KAWAKAMI et al：Sexual behavior of male adolescents with pervasive developmental disorders
*名古屋大学大学院医学系研究科博士課程健康社会医学専攻精神健康医学分野
［〒466–8550 名古屋市昭和区鶴舞町65番地］
**中京大学現代社会学部

不適切だとされることが起きやすいからである．特に「性」に関連した場面は世間の注目を引きやすく，思春期は「性」についての発達が特徴的でありそこで特異なふるまいをすると問題点として強調されやすくなる．

上岡ら(2007)は，アスペルガー症候群の子の相談を受ける際に性に関わる問題で「性器いじりやマスターベーションなどの性への執着行動」，「異性やその身体を凝視」，「ストーカー的行為」などが多いと述べており，このように社会的にふさわしくない性的な行動や好きな子への不適切な行動が他でも指摘されることが多い．しかし日本においては性の話題はオープンにしないという文化背景もあってか，彼らの性行動の実態を調査した報告は多くなく，どのような特徴を示すのかはっきりと分かっていない．今回，思春期PDD男児の保護者にアンケート調査を行い，彼らの性に関連する場面での行動の特徴と保護者のニーズをまとめる．

Ⅱ．方　法

1．対象

PDDのサポートグループである「NPO法人アスペ・エルデの会」に所属する，中学生・高校生のPDD男児(12～18歳)の保護者(母親) 66名を対象とした．児は何らかのPDDの診断を受けており，うち2名は強迫性障害の診断もあわせて受けているが，他には精神科疾患の合併症については認められなかった．なおこの2名の保護者の回答からは，神経症や恐怖症などの症状に該当するような記述は特にみられなかった．

2．調査項目の作成

①中学生PDD男児の保護者10名に「性的な行動」についてのフォーカスグループインタビューを行った．そこで場面にあった適切な行動ができない，子どもに性に関することをどう伝えていいか分からないといった側面で，思春期PDDと母親たちが困っている項目内容が明らかになった．

②①で抽出された項目と先行文献を参考に性行動調査票を作成した．

③性行動調査票の内容：「基礎情報」「社会的・性的な面の気づきやふるまい」「性教育について」「二次性徴に伴う身体変化への対処行動について」「保護者としてお子さんの性について」のカテゴリーに分け，選択式で回答を求める質問項目と記述式で回答を求める質問項目で構成した．

3．調査と分析

2007年6月～8月，対象者66名に調査票の回答を求めたところ，51名(中31，高20)から郵送・メールで回答があり(回収率77.3%)，記入者は父親が4名，母親が47名であった．記述回答は父母とも，選択回答は母親のもののみを集計した．その内訳は中学29名(普通校13，特殊学級14，特別支援校2)，高校18名(普通校12，特別支援校6)で，IQは70以上39名，70未満8名であった．数値化されたデータはχ^2検定で統計解析を行った．

4．倫理的配慮

調査はアスペ・エルデの会の倫理委員会の承認を得て行った．対象者に調査票を送り，承諾を得られた場合に調査票を返送していただいた．

Ⅲ．結　果

1．母親からみた子どもの性行動の修得状況・理解度

母親からみた子どもの性行動の修得状況・理解度の評価を表1に示した．

中学生と高校生，IQの差(70以上と70未満の2群)で比較したところ，基本的に多くの項目で統計的な差異は見られなかった．中学生と高校生の比較では「プライバシーの意味が理解できる」，「体のプライベート部位を他人に見せびら

表1　保護者からみた子どもの性行動の修得状況・理解度の評価

質問		1)できる	2)一部できる	3)全くできない	4)不明	無回答	自由度
①男性性器の名前とその機能の知識が一致している	中	9 (31.0)	9 (31.0)	6 (20.7)	5 (17.2)		3
	高	9 (50.0)	6 (33.3)	1 (5.6)	2 (11.1)		
②プライバシーの意味が理解できる[a]	中	3 (10.3)	15 (51.7)	3 (10.3)	8 (27.6)		3
	高	9 (50.0)	5 (27.8)	0 (0)	4 (22.2)		
③他人のプライバシーを尊重している	中	2 (6.9)	15 (51.7)	4 (13.8)	8 (27.6)		3
	高	6 (33.3)	7 (38.9)	1 (5.6)	4 (22.2)		
④自分のプライバシーを尊重してほしい	中	8 (27.6)	14 (48.3)	2 (6.9)	5 (17.2)		3
	高	9 (56.3)	6 (37.5)	0 (0)	1 (6.3)	2	
⑤学校，施設などの公衆のトイレが適切に使用できる	中	22 (75.9)	4 (13.8)	0 (0)	3 (10.3)		3
	高	14 (77.8)	3 (16.7)	1 (5.6)	0 (0)		
⑥宿泊研修や大衆浴場で適切に入浴できる[b]	中	21 (72.4)	7 (24.1)	0 (0)	1 (3.4)		2
	高	12 (66.7)	4 (22.2)	0 (0)	2 (11.1)		
⑦体操着や作業服など適切に着替えられる	中	22 (75.9)	5 (17.2)	0 (0)	2 (6.9)		2
	高	18 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
⑧家庭の浴室の戸を閉めて入浴する	中	25 (86.2)	4 (13.8)	0 (0)	0 (0)		2
	高	17 (94.4)	0 (0)	1 (5.6)	0 (0)		
⑨家庭のトイレの戸を閉めて入る	中	23 (79.3)	5 (17.2)	1 (3.4)	0 (0)		2
	高	17 (94.4)	1 (5.6)	0 (0)	0 (0)		
⑩体のプライベート部位を他人に見せびらかさない	中	19 (65.5)	10 (34.5)	0 (0)	0 (0)		1
	高	16 (88.9)	2 (11.1)	0 (0)	0 (0)		
⑪体のプライベート部位を見られたとき恥ずかしいと感じる	中	13 (44.8)	11 (37.9)	4 (13.8)	1 (3.4)		3
	高	15 (83.3)	2 (11.1)	1 (5.6)	0 (0)		
⑫体のプライベート部位はプライベートな場所で触れる[a]	中	9 (31.0)	10 (34.5)	2 (6.9)	8 (27.6)		3
	高	13 (76.5)	2 (11.8)	0 (0)	2 (11.8)	1	

学年による差の検定：a，IQによる差の検定：b　[ab] $p < 0.05$

かさない」にて有意差がみられ，高校生で理解が向上していた．またIQによる比較では「宿泊研修や大衆浴場で適切に入浴できる」のみに有意差がみられた．

知識や概念の習得程度の把握は保護者でも評価が難しいようで，「機能を言葉で表現できても意味を理解しているか分からない(中3)」と言った記述があった．

母親が行動面で社会的に不適切であると評価した内容の記述例をあげると，「大便の時，時々ドアが開いているので困っている(中2)」，「着替えのときは恥ずかしいという気があまりなく，素っ裸でも平気(中1)」，「家のトイレは狭いので戸を閉めると怖がる(中1)」，「同級生に

表2　保護者からみた二次性徴による行動変化についての評価

質問		1)あり	2)なし	3)不明	無回答	自由度
①マスターベーション	中	4人(14.3%)	22 (78.6)	2 (7.1)	1	1
	高	1 (6.3)	15 (93.8)	0 (0)	2	
②性に関して特別な興味がある	中	3 (11.5)	23 (88.5)	0 (0)	3	1
	高	4 (25.0)	12 (75.0)	0 (0)	2	
③(陰部の違和感がある場合)陰部を触れる	中	11 (50.0)	11 (50.0)	0 (0)	7	1
	高	3 (25.0)	9 (75.0)	0 (0)	6	
④異性への不適切な接近方法	中	6 (21.4)	22 (78.6)	0 (0)	1	1
	高	2 (12.5)	14 (87.5)	0 (0)	2	
⑤性に関する言葉を人前で口に出す	中	2 (7.1)	26 (92.9)	0 (0)	1	1
	高	2 (11.8)	15 (88.2)	0 (0)	1	
⑥テレビ・ビデオで性に関する描写を見たときの反応	中	13 (46.4)	15 (53.6)	0 (0)	1	1
	高	9 (50.0)	9 (50.0)	0 (0)		
⑦漫画や雑誌で性に関する描写を見たときの反応[a]	中	10 (37.0)	17 (63.0)	0 (0)	2	1
	高	1 (5.9)	16 (94.1)	0 (0)	1	
⑧実際に(水着姿など)性に関する描写を見たときの反応[b]	中	7 (25.9)	20 (74.1)	0 (0)	2	1
	高	1 (6.3)	15 (93.8)	0 (0)	2	

[ab] $p < 0.05$

下の毛を見せたことを笑いながら母に話した」，「ペニスが体にくっつくのが嫌なようで頻繁に所構わずペニスを触る，注意すると“どうしても気になる！”と怒る(中1)」などがあり，保護者としては対応や指導に苦慮するものであった．

2. 二次性徴に関する対処行動についての母親の評価

二次性徴に関する対処行動についての母親の評価を表2に示した．

中学生と高校生の比較では，「(性に関する描写がある)漫画や雑誌を見たときに何らかの反応をする」に有意差がみられ，中学生で反応をする者が多かった．IQによる比較では「実際に性に関する描写を見たときの反応」にて有意差がみられた．また，保護者による事前アンケートから子どもの二次性徴(声変わり，精通，発毛など8項目)の発現数によって三群に分け(0～3個は10名，4～5個は27名，6～8個は10名)他の質問項目と比較したところ統計的な有意差はみられなかった．

二次性徴への不適切な対処行動について記述例からあげると，精通では「おしっこをもらしたと思いショックを受ける」など，性器の勃起では「大きくなったことが気になり服の上からふれる」など，陰部(生殖器)の発毛では「抜く」「気にしてはさみで切ったことがある」などがあった．また，性にまつわる場面での反応の有無と対処行動について記述例をあげると，「気になる女の子に近づきすぎたり，キスするまねをする」，「気になった子にすぐ告白したがる，人から告白しろよと言われ言ってしまう」，「(テレビの性的描写の場面で)大きな声を出して耳をふさぎ部屋

表3　子どもの性行動に関連した保護者の不安

質問		1)はい	2)いいえ	3)不明	無回答	自由度
①お子さんの性に関することで対処していることがある[a]	中	8人(30.8%)	18 (69.2)	0 (0)	3	1
	高	1 (5.6)	17 (94.4)	0 (0)		
②お子さんの性に関することで困っていることがある	中	6 (24.0)	18 (72.0)	1 (4.0)	4	1
	高	2 (11.8)	15 (88.2)	0 (0)	1	
③お子さんの性に関することで心配していることがある	中	19 (67.9)	8 (28.6)	1 (3.6)	1	1
	高	16 (94.1)	1 (5.9)	0 (0)	1	
④本人が性行動を誤解してとらえてしまうかもしれない	中	8 (32.0)	16 (64.0)	1 (4.0)	4	1
	高	3 (18.8)	13 (81.3)	0 (0)	2	
⑤ある行動が性的だと他人に誤解されるかもしれない	中	6 (22.2)	21 (77.8)	0 (0)	2	1
	高	3 (17.6)	14 (82.4)	0 (0)	1	
⑥同性の人と適切に関われないかもしれない[a]	中	2 (7.4)	25 (92.6)	0 (0)	2	1
	高	5 (31.3)	11 (68.8)	0 (0)	2	
⑦異性の人と適切に関われないかもしれない	中	16 (64.0)	8 (32.0)	1 (4.0)	4	1
	高	9 (56.3)	7 (43.8)	0 (0)	2	
⑧特定の異性と性的関係を持つ機会がないかもしれない	中	16 (64.0)	8 (32.0)	1 (4.0)	4	1
	高	10 (62.5)	6 (37.5)	0 (0)	2	
⑨本人がエイズや性病にかかるかもしれない	中	7 (29.2)	16 (66.7)	1 (4.2)	5	1
	高	6 (37.5)	10 (62.5)	0 (0)	2	
⑩女の子を妊娠させてしまうかもしれない	中	10 (40.0)	14 (56.0)	1 (4.0)	4	1
	高	6 (37.5)	10 (62.5)	0 (0)	2	
⑪コンドームがうまく使えないかもしれない	中	16 (66.7)	7 (29.2)	1 (4.2)	5	1
	高	13 (76.5)	4 (23.5)	0 (0)	1	
⑫適切なマスターベーションができないかもしれない	中	13 (54.2)	10 (41.7)	1 (4.2)	5	1
	高	9 (56.3)	7 (43.8)	0 (0)	2	
⑬適切な避妊ができないかもしれない	中	17 (65.4)	8 (30.8)	1 (3.8)	3	1
	高	11 (64.7)	7 (35.3)	0 (0)		

[a] $p < 0.05$

を出るかチャンネルを変える」など，保護者として心配になる行動があった．

3. 保護者からみた子どもの性に関する心配事とニーズ

1) 子どもの性行動に対する母親の不安

子どもの性行動に対する母親の不安について表3に示した．中学生と高校生の比較で，「性に関することでの対処」に有意差がみられ，中学生で保護者が子どもに対し性に関する何らかの対処をしていることが多いことが明らかになった．また中学生の保護者は同性との関わりはあまり心配していなかった．中学生，高校生とも

表4　性教育プログラムへの保護者の要望(自由記述・複数回答)

内容	合計(人)	中学生	高校生
二次性徴による体の変化やその対処方法	11	6	5
異性との関わり方・付き合い方	10	5	5
性交・避妊・STD・エイズ	8	1	7
情報(性に関するものも含む)の扱い方	5	2	3
男性としてのふるまいかた	2	0	2
プライバシーについて	2	2	0
恋愛・愛について	2	1	1

6割近くの保護者が,「異性(女性)と適切に関われないかもしれない」と感じており,記述例をあげると,「同性異性にかかわらずスキンシップが多い」,「相手の本当の気持ちが理解できないかもしれない」,「相手と関係を持つまでのやりとりができないかもしれない」などの理由から,性的な関係を含め異性と適切に関われないかもしれないと考えていた.また,性行動に関連する手技のコンドームの装着やマスターベーションについては,「不器用でうまく取り付けられないのではないか」,「行為として可能だと思うが,シーンが適切かどうかは疑問」,「認知度のレベル,手先の不器用さが関与する可能性がある」などの回答がみられた.

2) 性教育プログラムへの保護者のニーズ

性教育プログラムへの保護者のニーズの自由記述を整理して表4にまとめた.

中学生13名,高校生14名の保護者の回答があった.性教育として希望する内容は,「二次性徴での身体の変化への対処方法」と「異性との適切な関わり方」が中学生・高校生とも多かった.次いで,特に高校生の保護者から「性交・避妊・性感染症(sexually transmitted diseases: 以下STD)・エイズ」の希望が多かった.性教育の取り組みについて,「本人のレベル(ニーズ)に合わせた内容で行ってほしい」が9名(うち中学生6名),「親としてどうしていいのかよく分からない」といった心配や不安が8名(うち中学生5名)からあげられた.

Ⅳ. 考　察

1. 思春期PDD男児の性的行動の特徴

今回の調査結果では,多くの項目において中学生と高校生とでの発達的な差異は見られなかった.そして,「着替えのとき裸でいても平気」「トイレの戸が開きっぱなし」など年齢に比して不適切なふるまいをする男児がみられた.さらに本人なりに「気になる」「痒い」などの理由があるようだが,「(陰部の違和感がある場合)陰部を触れる」中学生が多くみられ,「自分の体のプライベートな部分はプライベートな場所でのみ触れる」ことが完全にできると答えた中学生の保護者は32.2%と3分の1ほどであり,多くの男児が他人の前でも気にせず陰部に触れてしまっていた.また,性的な描写を見たときにその場をうまくやり過ごすことができず,声を上げて騒ぎ立てたり,じっと見つめるなど過度に反応する男児もみられた.今回の結果では高校生になると,こうした場面でより適切な行動を取ることができるようになってくるようであったが,特に中学生段階で不適切な度合いが多く保護者から感じられるようであった.Stokesらは調査結果から,プライバシーについての知識の乏しさやそれに関わる不十分な行動,不適切な

性行動などは年齢と関連しているかもしれないと示唆しており，行動を決める一つの要因である可能性があるので今後検討が必要である．一方でHellemansらは知的な理解度との関連も指摘している．本論文では理解度による差は確認できていないが，それはIQ70以下の群が少なかったことに起因するかもしれず，今後の検討が必要である．

思春期になり二次性徴による形態的および機能的な身体の成長は誰もが知るところであり，周囲から徐々におとなとして扱われるきっかけとなり，同時におとならしいふるまいをすることを期待されるようになる．PDD男児たちにとっても，本人の社会性の理解度合いに関わらず，周囲は年齢に見合った行動をとることを暗黙に要求してくるようになる．PDD男児の場合，社会が求める年齢相応の行動が周囲の状況から読み取れず，幼いころのままのふるまいをして，本人には悪意はなくても社会的には問題行動だとみなされやすくなるようであった．

2．保護者の不安とニーズ

保護者たちは子どもの性に関連する心配や不安を多く抱えていることが分かった．中学生では約7割，高校生では9割以上の保護者が子どもの性に関連することで心配していることがあると答えていた．Stokesらの調査から高機能自閉症児の保護者は一般の保護者に比べて，子どもの性に関しての不安が大きいと報告している．今回の調査の中心的な内容は，中学生が「二次性徴に関すること」，高校生が「異性との関わり方について」であった．これは中学生で始まる二次性徴による変化がより顕著なため母親が扱いに困ること，そしておとならしい身体つきになった高校生が不適切な女性への関わりで困ることがないか心配ということだろうと思われる．さらに，「間違った行為をしないように」という不安もあげられた．「親自身がどうすればいいのか分からない」という不安も多くあげられた．思春期を迎えたPDD男児を目の前にして，母親たちは子どもたちの不適切と感じられる行動に対して具体的にどうすればいいのか分からず悩んでいる様子がうかがえる．Rubleらは「親たちは子どもたちに関する性の情報をほしがっている」とまとめているが，今回の調査結果からみても関連した情報提供は，母親自身の子どもの性に関連する不安や悩みを減らすための一つの解決方法なのかもしれない．

3．広汎性発達障害児のための性教育プログラムの検討の必要性

二次性徴が始まる思春期は性に関する課題と直面する時期であるので，学校では性教育の実施が特に重視されている．一般の小中高等学校や特別支援学校では，性教育が各学校で多領域にまたがる年間計画に沿って実施されており，PDD男児たちは所属する学校で性教育を受けている．これらは二次性徴による変化，性交や避妊など知識提供型の一斉授業であることが多い．確かに性交経験の低年齢化やSTDの増加など現代の若者らが抱える問題などに対処するため，将来につながるさまざまな知識を学ぶためなど思春期の子たちにとって性教育は必要なものだろう．

しかし，学校で授業を受けているだろうにもかかわらず保護者から「本人のレベル(ニーズ)にあわせた内容で行ってほしい」というニーズがあるということは，PDD男児たちへの性教育は一斉授業では十分補いきれていない可能性が指摘できるであろう．実際にPDD男児の保護者が希望する性教育内容は，「二次性徴」「異性との関わり方」で，高校生になって「性交やSTD」に関するが増えていた．特に，「二次性徴に関すること」において，今回の調査でも精通と尿失禁との区別がつかなかった男児がいたり，性毛に驚きはさみで切ってしまう男児がおり，本人の理解

度に合わせて丁寧に二次性徴を伝えることが必要であると思われる．また，性交や避妊の前提段階の「異性との関わり方について」は一般的には生活の中で自然に覚えていくことなので，定型発達児向けの授業では明確に学習内容とは位置づけられていない．しかし，PDD男児に対しては実際に異性との具体的な距離を何センチ取ればいいかなど，具体的な異性との距離や付き合い方を詳しく伝えたり，模擬練習するなどの機会が必要である．上岡らも障害特性を踏まえた一人ひとりに応じた対応が必要となると述べているように，PDD男児たちへは一方的な知識提供ばかりだけではなく，保護者や本人との相互のやりとりからニーズを把握し，それに見合った情報提供と具体的な適切な行動の方法を示すといった行動面でのアプローチを考えていく必要があるだろう．現在，日本においてPDDのための性教育は特別になされていないことが多いので，彼らの障害特性に沿った教育方法を開発し，そのための教材を作成することなどが，今後は必要となるであろう．

今後の課題として，今回は思春期PDD男児の保護者のみの調査であったので，定型発達の保護者への調査とその比較，また思春期PDD女児の保護者の調査との比較などから，彼らの性教育領域での支援ニーズをより客観的に把握すること必要である．

文　献

古荘純一，岡田　俊：アスペルガー障害と思春期．（アスペルガー障害とライフステージ　発達障害臨床からみた理解と支援，古荘純一編）診断と治療社，東京，2007，pp.108–138

Hellemans H, Colson K : Sexual Behavior in High-Functioning Male Adolescents and Young Adults with Autism Spectrum Disorder. Journal of Autism and Developmemtal Disorders 37 : 260–269, 2007

上岡義典，島　治伸：軽度発達障害に対する性教育のあり方．（現代のエスプリ476号，石川元編）至文堂，東京，2007，pp.168–172

Ruble LA, Nancy J, Dalrymple MS : Social/Sexual Awareness of Persons with Autism : A Parental Perspective. Archives of Sexual Behavior 22 (3) : 229–240, 1993

Stokes MA, Kaur A : High-functioing autism and sexuality A parental perspective. Autism 9 (3) : 266–289, 2005

*　　*　　*

■原　著■

高機能広汎性発達障害男児の自己の感情の認知

―感情喚起状況における表情表出に関する認知の検討―

吉橋由香[*1)]　神谷美里[*2)]
宮地泰士[*2)]　辻井正次[*2, 3)]

Key words：広汎性発達障害，自己感情の認知，表情

要旨：本研究は，感情を喚起する状況における自己の表情の認知について，広汎性発達障害(以下，PDD)児の特徴の検討を目的に質問紙調査を行った．対象は，PDD群は小学3から6年までの男児42名，対照群(以下，N群)は小学3から6年までの男児205名であった．課題として「喜び」「怒り」「悲しみ」の感情を喚起する状況文を各感情2文ずつ用意した．児童は各状況において「あなたはどんな顔になりますか」という設問に，「喜び」「怒り」「悲しみ」「驚き」「恐れ」「無表情」の6つの表情画のいずれかを選択することを求められた．結果，PDD群はN群に比べ，感情を喚起しやすい状況で，感情を「驚き」表情で表出すると考える傾向が高かった．これは，急な出来事に関する状況文で特に見られる傾向であり，感情と共に状況を捉えきれず選択されたと予測される．ただし，本研究は方法論に課題があり，結果が適切かどうか，今後さらなる検討が必要である．

Ⅰ．目　的

広汎性発達障害(以下，PDDと記す)児者が感情認知に困難さを抱えることは従来から指摘されてきた(井上，2004)．“他者感情”の認知に弱さがあることは対人トラブルの要因ともなるため，そのメカニズムと支援策の検討は当然必要である．また，“自己感情”の認知の弱さは感情のコントロールの弱さにつながり，トラブルの引き金や不適応の要因となり得るものであるため，やはりメカニズムと支援策の検討が必要である．しかし，これまで“感情認知”の困難さについて検討する場合，主に“他者感情”ついて焦点が当てられ，“自己感情”について十分に扱われてこなかった．

PDD児者の自己感情の理解やコントロールの困難さについて，苦手さ自体は日常生活の観察から知ることができるが，具体的にどういった

Yuka YOSHIHASHI et al : Acknowledgment of self-feelings of Child High Function Pervasive Developmental Disorder ― Examination of acknowledgment concerning facial expression in the situation in which feelings are roused ―

*1) 岐阜聖徳学園大学教育学部［〒501-6194 岐阜市柳津町高桑西1-1］
*2) 浜松医科大学子どものこころの発達研究センター，*3) 中京大学現代社会学部

側面が苦手なのか容易に理解しにくい(神谷ら, 2007). また, 実際に支援プログラムを作成し, PDD児の自己感情の理解とコントロールに対して実践的介入を行った研究に, 吉橋ら(2008), 宮地ら(2008)がある. これらの研究は, きめ細かな支援を考えていくために, PDD児の自己感情の認知と理解に関し, 知見を重ねていくことが不可欠であることを指摘している.

感情が最も表れやすいもののひとつに「表情」があると一般的に考えられている. ここで, PDDの自己感情認知の脆弱性について特に表情に着目し, 検討した研究を振り返ってみる.

菊池ら(2001)は, 自閉症者自身・母親・大学生の表情写真を用い, 相互にその表情の示す感情を答えさせ, 自閉症児の他者および自己の表情認知の特性を検討した. 統制群と比較した結果, 自閉症児・者の表出した表情は他者から分かりにくいが, 自閉症児自身は自己の表情に対して統制群と成績に相違を示さず認知できていた. これは, 自閉症児が自己の表情について特異的な理解をしているがためではないかと考察している. 菊池ら(2001)の考察は, 自己感情の認知を考える際に, 困難さという視点のみではなく, 特異性の視点からも知見を重ねる必要性を述べており, これはPDDの表情認知についての重要な示唆である.

ただし, 日常場面では, 感情が喚起し表情として表出する前に先行して感情を喚起するイベントや状況が存在することが多いが, 菊池ら(2001)はその点が考慮されていない. 吉橋ら(2009)は, PDD児が, 表情の表す意味と感情を喚起する状況を繋ぐことに苦手さを有する可能性を指摘している. その可能性を加味すると, PDDの自己の表情認知について, さらに状況との関連を視野に入れ検討する必要があると言える.

吉井ら(2003)の研究では, 他者理解と自己理解に関する課題に加え, 感情理解の課題を設定し, PDD児の自己の感情の認知について考察した. 感情理解の課題では, まず, 6つの表情線画がどのような感情を示すかの説明を求め, その後, どんな時・状況において, そのような気持ちになるかを尋ねている. その結果, PDD児は対照群に比べ, 感情喚起の原因を具象物や自己に帰属しやすい一方で, 否定的な感情においては, 他者に帰属しやすいことが特徴的であると述べている.

吉井ら(2003)の研究は時・状況にも着目した有意な研究であるが, 表情刺激から, 原因となる状況にさかのぼる回顧的課題であり, PDD児・者がエピソード記憶に困難を抱える(山本ら, 2004)ことを考え合わせると, その要因を排除できる方法を用いて検討を重ねる必要がある. 合わせて, 対象のマッチングの問題や知的能力の影響が拭い去れないため, さらに対象を統制した検討が必要と言える.

また, 宮地ら(2008)は, 実践的介入の考察から, PDD児は自己の感情や表情の理解においてさまざまな困難さを持っていることが認められ, 特にある状況が起こった瞬間的の感情(驚き)にとらわれて, その後の感情の変化やエピソード全体としての気持ちに考えが及ばない傾向が観察されたと報告している. さらに, 場面状況や物事を断片的にとらえるPDD児の特徴が, 体験的な自己感情理解や表情理解を困難にさせている可能性を指摘している. そして, これらPDD児にみられるさまざまな困難さがどのような要因によって起こるのか, また瞬間的な感情にとらわれる傾向もPDD児に特有の傾向なのかどうかは今後検討していく必要があると提言している.

上記を踏まえ, 本研究では, 基本的な感情である「喜び」「怒り」「悲しみ」の感情が喚起されると想定される状況を設定し, その状況におけ

表1　状況文一覧

No	内　容	喚起する感情
①	お誕生日におうちの人がプレゼントを買ってきてくれる	喜び
②	友だちにいやなことを言われる	怒り
③	大好きな友だちが転校してしまう	悲しみ
④	おうちの人が夕ごはんに大好きなおかずを作ってくれる	喜び
⑤	楽しみにしていた旅行が中止になる	悲しみ
⑥	遊んでいたおもちゃを友だちにむりやりとられる	怒り

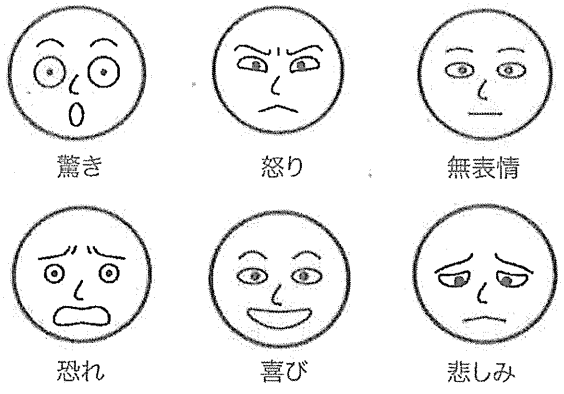

図1　表情画

るPDD児の自己の表情の表出の認知について焦点を当てて検討することを目的とし，調査を行う．

また，吉橋ら(2008)が述べるように，PDD児の「怒り」の感情の理解とコントロールについて，知見を重ねることは彼らの社会適応の支援と自尊心の低下の予防を考える上で必須である．よって，本研究においても「怒り」の感情に焦点を当て，自己の表情の認知と感情体験の認知との関係について分析を行うこととする．

Ⅱ．方　法

1．手続き

調査1：本研究では，質問紙による調査方法を採用した．笹屋(1997)を参考に「喜び」「怒り」「悲しみ」の感情を喚起すると想定される状況に関する文を各感情につき2文ずつ合計6文作成した．作成した状況文は表1に示した通りである．被験者は，各文に書かれた状況において，「あなたはどんな顔になりますか」という質問を受け，選択肢として提示された表情画のうち当てはまると思われるものに1つだけ○をつけるよう求められた．選択肢として挙げられた表情画は「喜び」「怒り」「悲しみ」「驚き」「恐れ」「無表情」の6種類である．表情画は，イラストレーターに依頼し作成した．使用した表情画は図1に示した通りである．

調査2：怒りの感情について，表情認知と自己の感情の認知との関係を調べるため，坂井ら(2000)の小学生用攻撃性質問紙(以下，AQと記す)を実施した．質問紙の内容は，「すぐにけんかしてしまう．」，「ちょっとしたことで腹が立つ．」などの27の質問に，「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの4段階評価を行うものである．点数はその数値が低いほど，怒りの表出傾向が高いと考えられ，ダミー項目を除く22問の総計で最低点は22点，最高点は88点である．

2．対象

調査対象となったのは，NPO法人アスペ・エルデの会に所属する小学3年から6年までの高機能PDD男児42名(以下，PDD群)，対照群として小学3年から6年までの男児205名(以下，N群)であった．診断は児童精神科医によって行われた．なお，PDD児の女児が少ないため，今回

は両群ともに男児のみを対象とした.

調査1：両群ともに，すべての質問に無回答であった児を分析対象から除外した．またさらに，PDD群については，VIQ・PIQ・FIQいずれかが70以下の児を分析対象から除外した．結果の分析の対象となったのは，PDD群34名(3年 生11名，4年 生7名，5年 生10名，6年 生7名)，N群195名(3年生49名，4年生64名，5年生37名，6年生46名)であった.

PDD群のWISC－ⅢによるIQの平均は，VIQ＝105.2（*SD*=16.37)，PIQ＝101.9（*SD*=15.39)，FIQ＝103.9（*SD*=13.20)であった.

調査2：調査1に協力した児のうち，調査2にも協力した児が分析の対象となるため，データのマッチングを行ったところ，PDD群28名(3年生7名，4年生7名，5年生9名，6年生5名)，N群132名(3年 生27名，4年 生43名，5年 生27名，6年生35名)となった.

PDD群のWISC－ⅢによるIQの平均は，VIQ＝105.6（*SD*=16.39)，PIQ＝101.7（*SD*=15.78)，FIQ＝103.6（*SD*=13.35)であった.

Ⅲ．結　果

1．想定された感情を表す表情画の選択について

まず，各状況文について，喚起されると想定された感情を表す表情画を選択したかどうかについて，想定した感情を選択した場合を正答とみなし，6課題合わせた正答率を算出した．その正答率の平均値と標準偏差を表2に示す.

次に，正答率の平均値について，学年×群の2要因分散分析を行った結果，交互作用および主効果は有意ではなかった.

2．各状況文において選択された表情画について

表2に示すとおり，両群ともに正答率が高くなかったため，各状況文において，児童がどの表情を選択したかについて検討した．条件文ごとの度数を集計した結果を図2～7に示す．なお，図は各群の被験者数に相違があるため，度数ではなく回答の割合(%)で示している.

表2　正答率

群	学年	平均値	標準偏差
PDD	3	54.76	20.91
	4	66.66	23.57
	5	68.51	21.15
	6	53.32	34.14
N	3	66.67	19.05
	4	64.72	23.90
	5	54.94	20.59
	6	50.95	18.06

状況文毎に，群間での表情画の選択の違いを検討するため，フィッシャーの直接確率計算を行った．結果，群の要因は，状況③，⑤，⑥において有意だった(両側検定：p＝.003, .016, .043).

状況③「大好きな友だちが転校してしまう」では，PDD群は「怒り」「驚き」の表情を選択する傾向が，対照群に比べ高かった．また，この状況で「悲しみ」の表情を選択する傾向が対照群の方が高かった.

状況⑤「楽しみにしていた旅行が中止になる」，状況⑥「遊んでいたおもちゃを友だちにむりやりとられる」では，N群に比べ，PDD群の方が「驚き」の表情を選択する傾向が高かった.

3．「驚き」の表情の選択について

以上の結果より，PDD群は，感情を喚起しやすい状況において，「驚き」の感情を表情で表出すると考える傾向がN群に比べて高いことが推測される．これについて検証するため，次に，状況文毎に被験者を「驚き」の表情を選んでいるか，それ以外の表情を選んでいるかに分け，その度数に群間で違いがあるか比較検討した．児童が「驚き」の表情を選択したか集計したものを

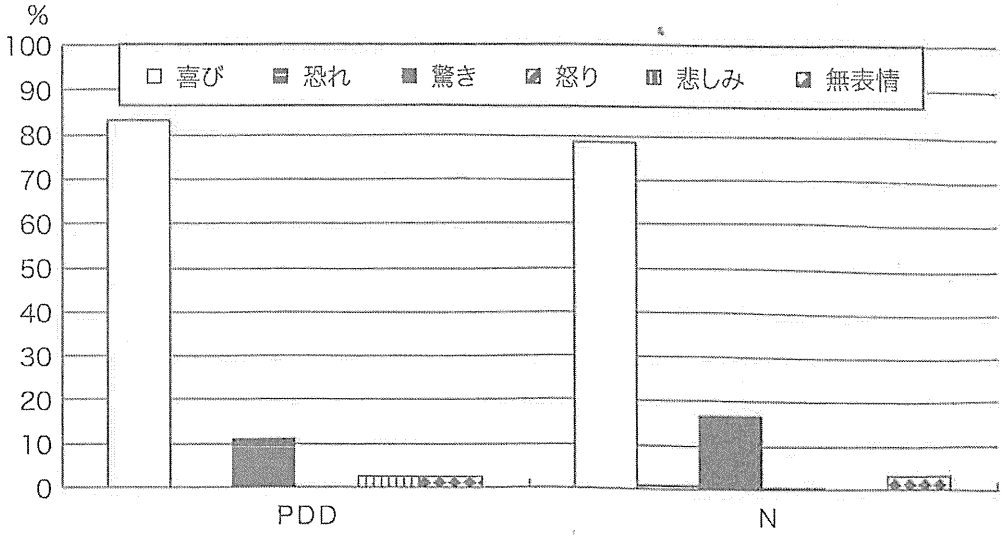

図2　状況①　選択した表情画(%)

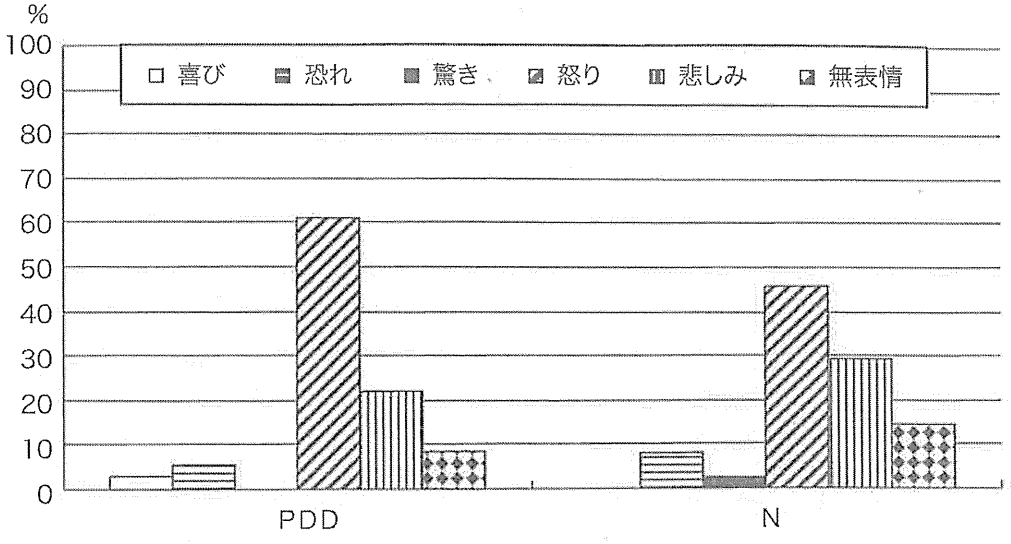

図3　状況②　選択した表情画(%)

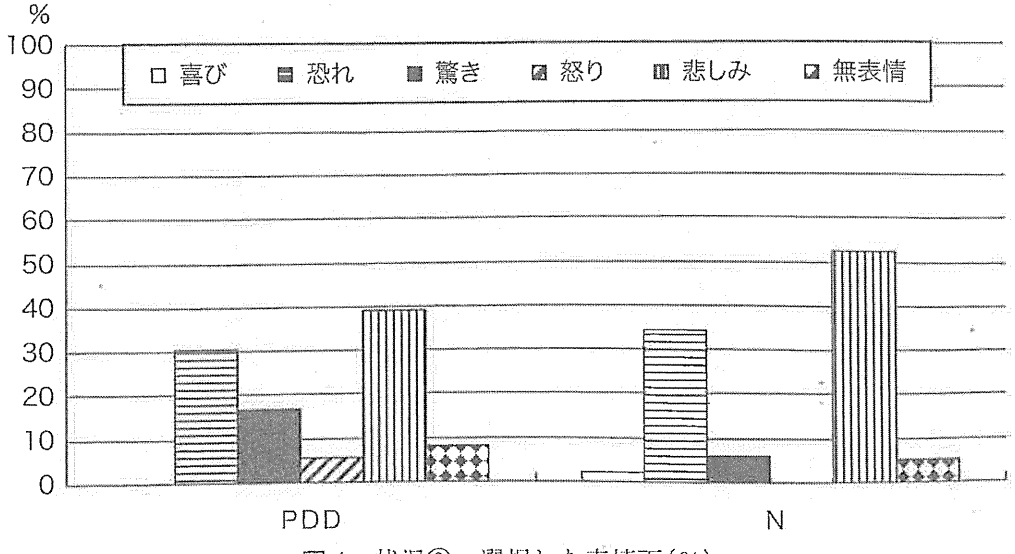

図4　状況③　選択した表情画(%)